

講演 言葉の意味とはいかなる現象か

内 田 賢 徳

1. 語の意味

2. 語源

3. 意味という経験

4. 意味形式からの自由な離脱

語の意味とはどのようなことであるのか。イヌという語があらゆるイヌを含むことができるのはなぜか。それを他との差異という概念で説明する。意味は、その言葉の属する文化史の中で決定されるが、それを解析することは難しい。しかし、方法的な語源学によってある程度は可能である。語源を知るとき、私たちは意味することの始原に立ち返ることになる。意味することの根拠としてあるものは、私たちの言語活動にいつでも立ち会っているものである。

ご紹介いただきました内田です。私は実は佛教大学の非常勤講師を務めておりまして、記紀、万葉集などを中心とした講義を担当しています。だから、私の顔を見たことがある人もあるでしょう。そんなわけで、私にこういう講演をと仰ったのは、上代に関する話を予定しておられたのかもしれないですが、授業もその分野で担当していますので、今日は少し趣を変えた話をしてみます。私が「言葉の意味とはいかなる現象か」というタイトルをつけたのは、言葉の意味というものを考える時に、私たちは、例えば現代語の辞書を引いたらそれは書いてあるではないかというような形で、自分のなかで処理をしてしまうような、不毛さというか、つまらなさを考えていただくたくないということです。それを手がかりとして私が今、田中みどり先生からご紹介いただきましたような、古代、特に上代という七世紀、八世紀の日本語について、今日お話することと関連して考えていることをいづらか感じていただければと思います、こういう題を選びました。

1. 語の意味

私たちがことばの意味と言うときにそれはどういうことであるのか。簡単な例からお話してみようと思います。まず、語の意味、単語ですね、例えばイヌという単語があ

ります。イヌということばの意味は、犬¹、²、³、…ⁿ…という個体のすべてに該当します、その¹、²、³…ⁿ…の個体差というようなものを超えて、あらゆるイヌに適用できるわけです。個体差というのは、色とか、足が長いとか、ずんぐりしているとか、そういうイヌの中の種類の差みたいなを含めて個体差ということにすると、それらを超えてイヌということは適用できるわけです。考えてみれば、私たちはどうしてか、シェパードのようなイヌも、マルチーズのような犬も「イヌ」と呼ぶことに何ら抵抗しないことが実際にあるわけです。では、イヌという意味は何か。辞書を引くとそこに書かれているのは、おそらく生物学的な、動物系統的な所見というもので、決して、私たちがイヌということばで了解しているはずのものではないわけですね。辞書というものは、ことばの意味が説明してあるものだと一般的には言われますけれども、説明してあるものは、意味ではなくて、例えばイヌがどのような動物であるかという、動物学的な、系統学的な所見と、イヌに属する様々な属性の説明というようなものであるわけですね。しかし、そういうものがイヌの意味だというなら、私たちはイヌということばを知ったときに、辞書に書いてある難しい説明を全部了解していなければならぬはずなのに、そんなこと何一つ知らなくても私たちはイヌをイヌと呼ぶ

ことができるわけです。そこにはある用意された用語があります。それは普通、概念という用語で呼ばれています。そして、その概念が当てはまる範囲、それを外延といって、その当てはまる内容のことを内包といいます。これは概念をめぐる普通の用語です。

「じゃあ、イヌということばは、何であるかを説明しなさい。辞書に書いてあるものではなくて、意味として理解しているものを、了解しているものを説明しなさい」と言われると頭の中に思い浮かんでいるアレくらいいいいようがないわけです。頭の中に思い浮かんでいるものは何であるかを少し分析的に言うのと、他との差、違いということに帰結してしまうのです。例えば、猫との違い、あるいは、イヌと近縁種であるはずの狼との違いというようなことですね。日本狼はもう、絶滅して標本しか見たことがないのですけれども、狼と言えば、イヌと似た動物であるということばは皆が知っている。例えば、犬と猫の差よりも、犬と狼の差というのは、辞書的な説明の中では小さいはずですが、ところが、だからといって、私たちはイヌということばと狼ということばの意味は似ているとは決して言わない。そこに意味というのは一体何であるかという一つのヒントがあるわけです。イヌをイヌと呼ぶのはなぜか。イヌというのは何との区別か。その答えをあげるとしたら、イヌ以

外の全てのものとの差であるということになるわけです。イヌということばに宿っている、その意味というのは、イヌと山との差、花との差、イヌと紙、あるいは三輪車との差になるのでしょうか、今私が挙げたものとの違いは、ほとんど、私たちの頭に浮かんできません。他との違い、差と言いましても有効なものとは無効なものがある。また、差ではなくて、同一のものにも有効なものとは無効なものがあります。例えば、プロ野球選手の身長が平均185cmという数値であるとする。大相撲の力士の体重の平均として、185kgという数値がある。これは同じ数値ではないかといつても誰も承認しない。それは、プロ野球選手の身長と大相撲の力士の体重を同じこととして比較する場は存在しないから。同じように、その差と言ったときにそれを比べることができないものがある。では、それはどういうふうにして決定されているのかと言うと、結局は文化、イヌについての文化という非常に曖昧なものとしてしか答えようがないということになるわけです。従って、イヌという語がどのようにして、犬と他との区別に働くようになったかというその文化史の意味を、私たちは分析できていないし、おそらくこれからも難しいでしょう。他との区別の仕組みは、どういうものであったかという、結局は語源ということに還るわけです。

例えば、ネコは語源を辿りやすいことばで、「ネ」というのは、猫の鳴き声から取ったものです。「ニャー」というふうな鳴き声を「ネ」という音に整え、それに、「コ」というのは、「ヒヨコ」がピヨピヨと鳴くかわいいヤツを言うのと同じ「コ」ですから、猫は、「ニャーと鳴くあのかわいいヤツ」。これが、意味なのですね。しかしネコということばを辞書で引いてもそういうことを書いてある辞書はまずありませんね。それが意味であつたはずなのですけれど。

鳴き声でその動物を捉えることは鳥にはたくさんあります。ヒヨコはかわいいのですが、鳥はしばしば「メ」というのがつきまして、「スズメ」とか、「ツバメ」とかの「スズ」とか、「ツバ」というのは鳥の鳴き声を元にしたもの。「メ」というのは「あいつめ」の「め」ですからあの鳥は「スズメ」とか「ツバメ」とか、みんなうるさいヤツというのが元になっているでしょう。

語源というのは、そういうものであるわけです。ところが、そうであるからといって、例えば、猫の名前は「ニャー」と鳴くかわいいやつ」という意味付けをどの文化でもしているものとしたら、それは普遍的なものとなりますがそんなことはないのです。例えば、英語では「meow : ミャオ」と鳴くことになっているのですが、名前は「cat」と

います。「cat」という語源は調べても分からないのですが、ミャオという鳴き声に基づいていないのは確かです。

日本語のイヌの語源は分からないのですが、英語の「dog」の語源は、鳴き声に発しているという一つの説があります。もともと、古い英語でイヌは「hound」ということばでした。これは、ドイツ語のイヌを意味する「Hund」と同じ系統の語です。英語とドイツ語は近い系統の語で、英語とドイツ語にはたくさんの方の対応を見出すことができます。英語はそういう比較によつて語源を明らかにできる恵まれた言語、その点に関しては幸せな言語であるのかもしれませんが。インド、ヨーロッパ語族は、古代インド語であるサンスクリット語も古典ヨーロッパ言語であるラテン語も元は同じであるということをいう用語です。そのヨーロッパ言語の全てが元は一つの言語から発しているということが、ずっと以前に証明されています。ですから、言語を介してどういつながりがあるかは明らかではありません。

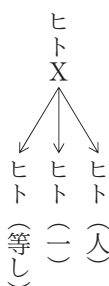
ところが日本語の系統というだけで、言語学者は取っ組みあいのけんかをしかねないくらい対立する色々な説があり、私は日本語の系統ということについて、よくこういう話をします。100軒の家から成っている村があります。その中で、まず、6割から7割が一つの親族であることが分か

2. 語源

つています。2割、3割がそれぞれ別の親族であるということも分かっているのだけれども、その100軒の中で、親戚がいるのかいないのか、どうもいらないしとか思えない家が1軒ある。それが世界の中の言語の系統における日本語の状況である。日本語は系統的に孤立した言語であるために、比較という形によって語源を明らかにすることが非常に難しいのです。ただし、実は日本語の「イヌ」も鳴き声に由来しているという説があります。これは、日本語は南方のポリネシアとか、あの辺のことばと同一の系統であるという論の人によってなされています。イヌの鳴き声の「ワン」というのと、それから「イ」「ヌ」という音節の構成は実は似ています。ただし「イヌ」の「イ」がワ行「イ」で記録された例は全く存在しません。つまり「ワン wan」と鳴く動物が「winu」と発音されていたという証拠まではないのです。ただ、南方系の言語を探してみるとそういうものが見つかる。しかし、それと日本語が同系統というのはドイツ語と英語のようにはっきりしたものではない。ただし、語の成り立ち、語源というものを考えてみることは、そこに託された考え方、つまりは、それはどのようなにして、そういう意味となったか、「ニャー」と鳴くかわいいうつ、という形での語源というようなものがある程度たどることはできるわけです。

ここで古代日本語がでてきます。古代日本語で、人は「*hitto*」と発音され、その場合の「ト」は「トリ（鳥）」の「ト」、あるいは「トキ（時）」の「ト」と同じで、「ト（戸）」の「ト」とは発音が異なっていました。上代特殊仮名遣と称する、七世紀、八世紀に特有の現象であります。つまり「ト」に甲乙二種があつて、ドアの「ト」は甲類であるけれども人の「ト」は乙類で発音が異なっているという現象であります。「ヒト」と同じく「ト」が乙類になるのは、一の「ヒトツ」の「ヒト」、「等し」の「ヒト」もそうであります。この場合、やはり甲乙の区別がある「ヒ」も同じ音節です。それらが同じであるということは、もとは一つの語に発していたと考えることができます。よく可能性があると言いますが、それらしきという意味では蓋然性ということばを使うことが正確なのです。元々、同源のことばであつた蓋然性が高いといえます。その場合に例えば、「イチ（一）」というのがまずあつて、それから「人」と「等し」ができて派生したと説明することが多いのですが、そういうふうには考えないで、「ヒト」というのは、それらに共通したある内容だつたと考えてみましょう。それをXとしますと、ここに挙げた図のような関係が描ける

ことになります。



Xがどんなものであったかはなかなか説明しにくいのですが、ひとまず、「人」と「一」と、それから「等(し)」の「ヒト」とは、同じ「ヒト」という発音の中で多義的な関係にあると一応説明することができます。では元のXは何だ、どんなものかというところ、何かが何かに「等しい」ということでその二つは一つである、一つであることの性質とはそこに二つの間に同一性があることを言っているので、「一つ」であるということと、「等しい」ということは、結ばれていきます。一つであるということは、またAならばAが、Aそれ自体に他ならないという同一性ということでもある。それ自体に等しい一つのものがもっとも感じられるのは、人とは一人である状態が分かるときではないのか、日本語の「人」というのは、それがそれ自身に他ならず「一つ」であることを了解したことばだったのではないのか。それを単位として人は家庭や社会を形成していくことになるのです。これは「人」ということばの理解にやや馴染ま

ない考え方を入れているのかもしれませんが、例えば同じ発音だったということから導くとすればそういうことが考えられるのです。

また、正しいかどうかは別として、このような考え方が、私が最初に言った「意味って一体何だったのだろうか」ということに至る一つの道であることは確かです。ただし、どのような場合にもそれを適用することはできない。それができる範囲は限られています。

「人」という語は、その単語の中に他の動物との比較は含んでいないのです。他との違いの話ですが、他との違いというのを意味としてそこには含んでいない。ところが「けだもの」とか、「けもの」とかいうときにはこれは毛の生えたもの、「だ」は「果物(くだもの)」の「だ」と同じで、果物の「く」は、「木」で、木になるものというのが、果物の意味であり、そして「けだもの」というのは毛の生えたもので、「けもの」と同じ名ですね。その「けだもの」、「けもの」は、「毛無きもの」に当たる「人」との区別というものを含んでいるわけです。「飛(と)ぶ」というのは鳥の「ト」と同じ語源の語であります。つまり、飛ぶものというのが鳥であり、飛ばざるもの、「人」との区別をそこに含んでいます。

最初に辞書を引いたら、そこには動物、例えば犬という

系統学的なものと、あるいは犬の生態に関する記述が説明としてあげられている、それらは私たちが実際に現実に使用していることばの意味ではないのだという話をしました。実は動物系統学は、植物も同じですが、そういう分野は、人その他の動物、生物との間に中心と周縁・周辺という扱い方をしないところで成り立っている。と言うと、意外に思われるかもしれませんが、現在、例えば進化論に触れた頁を開いてみますと、必ず書かれていることがあります。

人間が一番進化した動物だというのは誤りである。ダーウィンもそんなことは言っていない。人は人の生存形態、生きていく在り方として、もっとも適応した形をしているし、ゴキブリはゴキブリで今が一番適応した形をしているし、人に近いチンパンジーはチンパンジーでもっとも進化をした、一番適応した形をしている。もっとも進化した形態をしているという形では、あらゆる動物は同じである。それが進化論である。

と語られています。それが自然科学というようなことの一つの前提ですが、意味というものはそういう現象ではなくて、これは合理的ではないのです。ことばというものは人間を中心に見ていて、ことばの中に埋め込まれたその考え方というものがあって、それを考えているというのが私たちの仕事であって、決して動物系統学、あるいは動物の生態

学というものに還元することができないものであるのです。

3. 意味という経験

さて、それでは、ことばのその意味を通して、私たちは一体何をしているのか、意味経験というのの一体どういう経験であるのかを次に考えてみましょう。

ことばの意味によつて、私たちが一体何をしているかという問いに答えるのは、実は容易ではありません。しかし、意味というものをことばというものの中心に考えることは確かでしょう。音声というものは、ある場合には、楽音、音楽として、ある種の気分や情緒に対応している。スキヤットやカノンという歌い方があります。しかし、それは例えばどんなに楽しいこと、どんなに悲しいことを表現していても、それは言語ではない。どうして言語でないかというところ、そこに意味がないから。「ルルルルル」というのは、そこに意味がない。だからあれは言語じゃないという答えはすぐにでてくるでしょう。実は、そういうときには、意味ということの否定を知らないうちに含んでいるから言えるようになるのですね。

私たちは文字を持っています。日本語における文字の問題は大変難しい問題で、それは日本語学の一つの大きな分野をなして、それは例えばアルファベットのようなものと

は趣の違うものですが、ともかく文字は、それは点字も含んでのことですけれども、一つの図像、アイコンとしての意味をもっていることになります。しかしながら、例えば図像、アイコンと、一般の言語の記号であることの文字との間には、明らかな差があります。矢印記号と言語記号の違いを考えてみましょう。例えば、右の方を指している矢印は、右へという方向を指示するだけで、この矢印には右へという意味があるとは言わない。単に私たちの身体の体制、体がどうなっているかという体制に対して、右に向いた矢印はそちらの方向に注意を向けることを喚起する、そういう記号にすぎない。従って例えば、上を向いていることと、下を向いていることの間には、私たちは何か価値的な差があるような気がする。上向きと下向きとは、上向きの方が優位にあつて、下向きは劣にある気がするのですが、では、下向きの記号、それ自体が何か劣ということの意味しているのかというそうではないので、それは私たちの身体の相対的な在り方の中で決定しているのに過ぎないわけです。それ自体の中にそういうものが含まれているわけではないのです。

しばしば、例えば、アルファベットは音を表している、表音文字であるという規定があります。日本語のひらがなやカタカナも、あれは音を表しているという規定があります。

す。従って例えばその日本語のひらがなの「あ」は、「a」という発音を表しているのであつて、意味を表すのではない。これは普通に理解されていると思います。日本語の発音をきちんと書くかと思つたら五十音順で書かなければなりません。しかしながら、英語におけるアルファベットは決して音を表しているのではない。それは英語学の文字に関するものを紐解けば、いっぱい書いてあると思います。例えばaというアルファベットがネコの発音の時には「cat: [kæt]」という「æ」の音を表していて、秋を表す「autumn: [ˈɔ:təm]」には、auという形で「ɔ:」という発音を表しているので、アルファベットのaがある決まった発音を表していることではないのです。そういう意味では文字のaは、いくつかの母音に対応していて、そこではどの母音で発音するのか。例えば「cat」という語であるか、「autumn」という語であるかということで決定されていて、語という環境に依存しているわけです。

日本語のひらがな、カタカナは少し違いますが、ひらがなは表音文字のように見えて、実はその出発は、表音文字では必ずしもなかったのです。ある語を表すときにその文字が使われるのです。例えば文字がいくつか組み合わせられて一つの語を表している環境で用いられる、そういう文字でした。単独に発音を明示するものではなかったのです。

従ってそういうものはある種の表語文字という言い方をすることが出来ます。アルファベットもやはり、そうであります。表語文字の一番典型的なものは漢字です。漢字は一字で発音を表し、語形も持っていて、意味も持っている。

一語であり、かつ、一つの音であり、一つの意味である、そういうのを表語文字と言いますが、それと具体的なあり方は違うのですが、実はよく似たところがあるのです。

このように考えますと、音声や文字も個々の言語記号そのものが何かに対応しているのではなくて、語や文という一つの連鎖が有意義な何かを成立させていると言える。例えば、猫。猫のように「ネ」という音とそれから「コ」という音は、二音節だけでもそれを区別して説明できることは、実は少ないのではないか。そしてもっとも大きなことは、例えば日本語の音節の「ネ」がいつでも猫の「ニャー」と結び付いていたら、私たちは寝るときにいつも猫を意識しなければなりません、みんなが猫と寝ているわけではないのですね。そのときには全く、猫は関係がないということになります。語や文としてあるその音の連鎖というつながりが一つの有意義な何かを成立させる。そういうことが言えるわけです。

さて、先に進みまして、ではその語や文の連鎖の中で何か意味を特に表すこと。これを言い表す、あるいは言表と

いいます。今ここで言い表しということばで申しておきますと、そうした言い表しというものが、何らかに有意義に限定されることは一体どういうことであるのか。例えば、

「雨が降っている」という言い表しによって、私たちは外界のある状況を把握しています。そして望むなら外にでて雨に濡れることもできるわけです。その際、「雨に濡れる」と私たちが言い表している事態には、感覚的な事実を含むものがあります。例えば、濡れることがどういう感覚的な事実かと言うと、皮膚に微量でない液体との接触が知覚されることというふうになります。しかし、例えば、ほんの一滴、スポイドから分かるか分からないほど垂らした少ない液体、微量の液体が手に着いた時に、私たちは手が濡れたと言うだろうか、また風呂でもプールでもいいですが全身を浸かるときには、私たちはそれを、今私は濡れていると言うだろうかという、私たちはそうは言い表していないのですね。例えば、雨のような量の液体が、私たちの皮膚に感じ取られることを「濡れる」というふうに言っている。それは言い表そうが、言い表すまいが私たちにすでに経験していることではないのか。いちいち雨に濡れると言わなくても濡れることはあるので、それは、ことばの意味ということ以前の問題ではないか。正確な言い方をすると、言い表しは、そうした知覚として、何かに触れたら―それ

は説明としてはことばで言うしかないのですが――触れているという反応をします。何かに当たっているという感覚は、言語以前に私たちに了解されている何かです。私たちの身体、感覚に了解されているという何か、そういう了解の仕方を知覚といいます。そうすると、そういう知覚があつて、言い表しと私たちが呼んでいるもの、「雨に濡れる」という言い表しは、すでに皮膚の上に起こっている出来事をなぞって模写しているに過ぎないのではないか、という疑問が出てきます。その疑問は一見答えようがないほど正當に思えて、どう違うのだと言われると答えられないように見えます。しかし、我々の感覚的な出来事は、そのように整理された、きわだった輪郭をもっているのだろうかということが逆に問われてきます。

「痛い」という感覚と「痒い^{かゆ}」という感覚は共に触覚に属します。痛覚という似たような言い方もしますが、触覚に属することです。しかし、「痒い」という皮膚上の出来事を、実験的に「痒い」ということばを放棄してじつと観察すると、そこにはきわめて微かな痛みが体験されるはずで、つまり微かな痛みというものと、しっかりした痛みは程度差をもっていて、私たちの皮膚上の感覚では実は連続しているわけです。その連続の中でその刺激に対する反応をまとめて「ゲシュタルト」といい、体制という訳が当

てられています。刺激の強さに対する反応の差という形で変化をもっています。例えば蜂に刺されることと、蚊に刺されることの間には大きな感覚上の差があります。しかし、そういう差はあつても、その二つ、蜂に刺されることと蚊に刺されることとは、例えば同じ痛みの触覚の中でも、痛さと温かさや冷たさというような違いとしてあるのではない。やはり、ある連続性というものをもっている。方言的な言語事実としては「痛い」と「痒い」の中間体に「痛痒^{がゆ}い」という言い方をすることがあります。方言は感覚形容詞において、独自に共通語とは違った分野や分かれ方をもっていることがよくあります。しかし、「痛痒い」というその中間は、「痛い」と「痒い」に対して、第三の感覚を言い表しているのではなくて、その「痛い」と「痒い」の連続のある相を取り出しているに過ぎない。では、「痛い」と「痒い」の私たちのこの区別は何なのか。

感覚の出来事、皮膚の上の感覚というのは知覚され、その反応という系に閉じられているのではなくて、我々はそれをより高い次元で再統合して、そして、その感覚的連続体をデジタルに再び分節する、分けるということをしているのです。そのときに働いているのは要することばというものの、概念といつてもいいですが、ことばなのです。微かな痛みが独特の不快さを伴って続いていくときに、私

私たちはその痛みに対しては本来無効であつて、かえつて逆効果になりそこねない反応や行動を取ります。「搔く」という行動・行為こそがその反応であつて、それに即して、

私たちに感じられてゐる感覚、非常に微細な「痛み」という感覚は「痛い」ということとは區別して「痒い」と言い表されてゐる。「痒い」ということばは古語では「かゆし」ですが、これは「搔く」ということばと關係があるに違ひない。ただし、今痒い状態であるという意義の「かゆ」という動詞があるわけではないのですが、その「痒し」は「搔く」ということばと關係してゐると思われまゝ。一方、痛いほうの「痛し」は、古語で言うところの形容詞「いたし」ですが、これは、「イタシ」と言うときの「いた」、「甚だしい」というときの言い方であつて「痛い」というのは、要するに名状しがたい、独特の言い表しがたい体の危機というものを「甚だしい」「甚し」というふうに言い表してゐるわけです。「痒い」すなわち搔きたい状態と、「痛い」ということは感覚の上では、連続してゐるにもかかわらず、私たちは、全く違つた名付け方をしてそれを區別してゐます。それが今私の言つた高い次元からの再統合です。

もし、この「痛い」と「痒い」を區別することが単に私たちが感覚、知覚してゐるものをなぞつてゐるに過ぎないのだとしたら、この命名法は諸言語に共通していなければ

ならない、あるいは共通していてもいいのではないかと言えるでしょう。

実は共通してゐる要素がある語が存在します。それは、「母」という語で、多くの言語で両唇音を伴います。口を自然に開いて発される音が幼児にとつて、最初の対象としての人物を指す語となる。英語の「mother: [ˈmʌðər]」「mummy: [ˈmʌni:]」、日本語の「母 [haha]」。日本の「ハハ」が両唇音であつたことは平安時代のなぞなぞの本でよく知られてゐるのですが、両唇音「papa」は、唇音退化についての理論がもし正しいのだとしたら、そのずっと以前には「papa」であつたはずで、「ハハ」という語がそこまで遡るかどうかは分かりませんが、多くの言語では両唇音で表されてゐるという現象がありますから、私たちの感覚というものとことばによる再統合はいつも無縁であるとは限らないのかもしれないのです。けれども、例えば「痒い」と「痛い」という日本語と同じような區別が、外国語にもしあるのだとしたら、それは知覚をなぞつてゐることになるのです。

例えば、「痒い」というのは英語で「itchy」といいますが、痒いところを搔きむしるという英語は He scratched the itchy spot hard. という言い方をして、搔くを意味する語の音は、その itchy という語の音とはまったく關係し

ていないわけです。これは漢字にも同じようなことが見られます。痒ユキという字、これは病んでいるところの名前で、その上に「搔ソウく」を書いて「搔痒ソウヤク」と言います。日本語とは、再分節の仕方が異なっているわけですね。こういう点でも私たちがもっている意味の世界は、それぞれの言語、私たちの場合なら、日本人という意味ではなくて日本語人という、日本語を母語としている者たちではありますが、そこに独自のことであるのです。日本語には「痒い」と「痛い」ということばがあつて、そのやり方は独自で、外国語と同じでないのです。私たちの日本語を母語とする一言語族の文化史の中で形成されてきたということになります。前に申しましたようにそれを完全な形で分析して跡づけることは不可能ということになります。

同様のことが「雨に濡れる」というなかにも実は認められまして、濡れることは、皮膚が水分に接しているという身体上の出来事を単に反映しているわけではありません。あまりにも微量であつた場合は、私たちは濡れているとは言いませんが、例えば、スポイトで手の平に少しの水滴を垂らした場合でも、触覚的な事実として水分を感じしているのは確かです。一方、私たちが濡れていると呼んでいるその現象の語は「ヌルヌル」とかあるいは、「ヌルイ」といった語と語彙的な関連、連合をもっていて、そしてその

反省をさらに深めればおそらく、沼・池沼の「ヌマ」の「ヌ」とも連合をもっている気がつくのです。そこに重なるのは、感覚的な事実ではなくて、水分が皮膚に付着することへの了解の仕方という文化史的なことでしょう。日本文化の中で生きてきた日本人、この列島で生きてきた日本人は他民族を比べると濡れることを忌み嫌う民族であると言われています。濡れることが嫌だ、従つて、例えば、ぬるぬるしているとか、ぬめりとか、また不気味な沼の「ヌ」というものと、濡れるの「ヌ」ということは共通したある不快さのところにつながっていくのです。

一方、例えば英語の中にはこういった事実は存在しません。get wet (濡れる) と slippery (ヌルヌル) とは共通していません。アメリカ映画を見てみると、この人たちは濡れるのが平気なのだなと思うシーンもあり、それを文化史というにはあまりにも断片的ですが、何かそうした濡れる、水が皮膚に付くことに対する把握の仕方がこういう語を決定していると言えるのではないかと思います。

例えば、感覚しているところを我々が再統合することとは、その感覚的な刺激と反応の中にのみある存在と比較することによつても言えることです。一匹の小犬が雨に濡れている、そういったシーンをテレビでよく見かけられるのではないかと思います。このテレビの中で犬が濡れている

というのは、私たちが言っているものです。子犬に水に接している感覚があるということは、体を震わせ、水滴を飛ばす反応といった動作を見せることによって明らかであります。犬によつては雨を避けることもあるでしょう。しかし、そうした体を震わせるような行動は、犬の生態のなかで条件づけられた反応であつて、そこに決定的に欠けているのは、雨に濡れている自己という分別なのです。雨に濡れている自己という意識は、そこには存在しません。従つてその小犬には、望んで雨に濡れるという意志的な行動は存在しないのです。生態的に取つた行動がたまたまそう見えることはあります。叱られて反省しているのねと見えることはありますけれども、所詮人間が感情移入しているだけです。動物という存在は、ただ無明のなかを生態に即して行動するものであつて、動物は、永遠の自己疎外であるというふうにはホセ・オルテガというスペインの哲学者が書いています。オルテガは、人間は語源的な存在であるというふうにも言っています。語源的な存在というのは、今日、今、私がお話したようなことに対して、自己の内部に反省をもつような存在を言うのです。

4. 意味形式からの自由な離脱

ここまでお話したことで、私たちは意味というその現象

が決定的にあつて、それから自由でないかのような印象をもたれたかと思いますが、実は私たちは、文化史的に決定した意味に対して、きわめてルーズな存在でもあるのです。阪急電車では終点の河原町でこんな放送をします。

傘などお忘れ物のないよう、左側からお降りください。誰も何も感じません。文句を言っているのは私だけです。これは日本語の「よう」という語の用法としてはおかしいのです。例えば、幕末に日本にやってきて初めて和英辞典を作つたヘボンには、「よう」という語がどういふふうに観察されていたか。

転ばないように Take care that you don't fall.

落ちないように So as not to fall.

人の命を助けるように in order to save life
「〴〵のために〴〵をする」、ある目的があつてその行動をするというのが、「〴〵であるように」、という構文です。だから同じ阪急電車の車内放送は「途切れないよう、続いてお降りください」そう言っているわけです。これが正しいとすると、終点で言っているのは、右側から降りたら傘は忘れてしまうのか、ということになります。誰もそんなことも考えないで、左だけ開いていて右側から降りられないので黙つて左から降りていますが、そんなことを言っているのは私だけです。私は気になつて、電車に乗るたびに注

意しているのですが、名古屋電鉄のアナウンスは、立派な日本語でした。

お忘れ物のありませんようご支度ください。

というものです。おかしい例は他にもありまして、例えば、栃木県の足利図書館では

展示品に手を触れないよう、ご覧ください。

と書いてあります。これは阪急の例と同じ用法で、日本語の基本的な用法としては辞典に登録されていませんが、私たちはこれを自然に認める方向に進みつつあります。話し手の意図する意味と言い表しとがずれているのです。その意味の通りに理解したら、右側から降りてはいけないのだという指示となるのにそうはいかないのです。

こうした現象の少し外側に誤用という現象があります。

例えば野球中継で、「あ、見事に失敗しましたね」とか、CMで「キンビールがもつとおいしくなりました」など、放送する側で、誰も抵抗をもたなかったのだろうかというのがあります。しかしながら、元々誤用であったものが今は受け入れられて、普通になっているのがいくつもあるのです。例えば、「何々したり、何々したり」というと重ねるものは、あとの方を重ねないようになっています。「勝手にえさをやったり、さわらないでください」「許可なく写真を撮ったり、スケッチをしないでください」、そこま

では、私は大変抵抗があるのです。しかし、私も抵抗をもっていない、けれどもかつては正しくなかった言い方があるのです。「えんぴつとノートをください」、これは「えんぴつとノートとをください」というのが正しい日本語であったのですけれども、私は口うるさい方なのですが、それでも「えんぴつとノートを」は言っているのです。こうした間違いがすべてなくなり正しくなると、これらを調べている私は仕事がなくなり……、その点これらはあつた方がいいのですけれども、実は私たちはその変化を絶えず受け入れることにちつともやぶさかではなく、そういうふうにしてことばの意味に對していることも確かなのです。

ただし、今日私が言いたかったのは、そういう環境のなかにあつても言い表しということが、もともとの意味の働きの、立ち会って初めて遂行されているのだということへの反省をもつことが必要なのではないか。そして、そういうことのずっと深いところに、例えば、私と古代の日本語との出会いがあるのだというふうに、私は思っているわけであります。

最後にそうしたことを私のようにたどたく言わないで一言で言い表した文を紹介します。江戸時代の『あゆひ抄』（富士谷成章）という著作に書かれています。

「あめつちのことたまは ことわりをもちて しづかに

たてり」

「あめつちのことたま」というのは、言語の働きの根源にある、ある存在です。それは、「ことわりをもちてしづかにたてり」というわけですから、その存在がいづでも私たちが、言い表し、つまり言語を使っている傍らにそっと立ち会っているんだというふうに言っているのです。まさしく、その通りであると私は考えています。